牛木商事の

かってに かわらばん

《第７号》

☆☆☆名立の民話☆『名立崩れ』☆☆☆

昔、昔のこと。名立に五郎兵衛という漁師が住んでおったとさ。

妻はお仲といい夫婦にはお今という十七歳になる娘がおった。

ある日のこと。漁に出た五郎兵衛が海から戻り、仲間の漁師衆と一緒に浜の小屋でお茶を飲んでおったとさ。

女衆は捕れた魚や網の片づけをしながら、小屋の入口でにぎやかに話し込んでおった。そこへ一人の年とった旅の僧が通りかかって『すみませんが少し休ませてくださらんか』といって小屋に入ってきて腰を下ろし、出してもらったお茶を、それはうまそうに飲んだ。

みんなはまたにぎやかに話し出した。『このごろは風も吹かんし、海も荒れんのにどうして空が暗いんだろう。半月ほどから、海の空が赤くみえるんだが、不思議なこともあるもんじゃて』

じっと村の衆の話を聞いておった旅の僧がゆっくりうなずきながら、『昔、空が暗くなり海が燃えるように赤くなったことがあったそうじゃ。みんなが不思議に思っていたら、ある日突然“ゴオッー”と恐ろしい音がし、あっという間に家も人も土の中に埋まってしまったということじゃ』恐ろしそうにいうとまたつづけていうた。

『たった一人、このことが起きることを予感して遠い所へ逃げて助かった者がいて、その人の口から空が暗くなり、海の空が赤く燃えるとかならず災難がある、といい伝えられておるんじゃ』この話を聞いたお今は『このごろ、空が暗く海の空が赤く見えるのはそん時のような災難が起きるということでは…』

声を震わせていうと五郎兵衛は、『ふん、ばかばかしい。いい加減な出まかせをだれが信じるものか。早よう出て行け、こじき坊主め』と声を荒げて旅の僧を外へ引きずり出してしまったとさ。

お今は、『あの方は尊いお坊様でこの村の災難を救ってやろうと立ち寄られたのかもしれん…』と心の中で思いながら、すごすごと立去る旅の僧の後ろ姿に手を合わせたとさ。

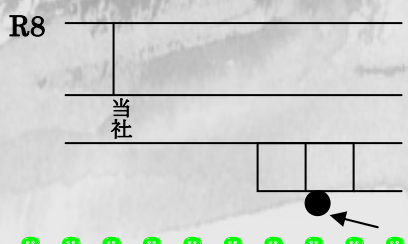
そのころ、沖で漁をしていた漁師たちが、名立の空が真っ赤になっているのを見て、『大変だぁ、名立が火事じゃ』といって慌てて浜へ帰って来たとさ。

漁師の衆が浜について見ると、いつもと変わらん静かな村があったけん、海の方を見ると、今度は海の空が真っ赤に燃えているように見えたとさ。その夜のことだった。

“ドドド～ン”すさまじい音がしたかと思うと裏山が崩れ落ち、あっというまに村は土砂の下敷になり海へ向かって土砂がものすごい勢いで流れ出て行ったそうな。

たった一人だけ、旅の僧の言葉を信じて、遠い所へ逃げたお今だけが、恐ろしい災難からのがれることができたそうな。

今から二百五十六年前の四月二十五日の真夜中日は二十六日に変わった午前二時ごろ、突然起こった大地震で、その年の十二月二十七日に年号が宝暦と改められたので『宝暦の大地震』と呼ばれるようになりました。今も崩落のツメ痕が山肌に残っているといわれます。

竜宮の鐘（りゅうぐうのかね）

名立小泊、宗龍寺の梵鐘は、「名立崩れ」の際、土砂とともに押し出され100年あまりも海中に沈んでいました。明治の初めころ、変わった海鳴りを耳にした漁師が発見し引き上げたといわれています。乳（鐘のまわりについているいぼ）が欠けていたり、凸凹があったり、名立崩れのものすごさを今に伝えています。